

「留学経験」考

ヘルマン・シュヴェッペンホイザー先生を追悼しつつ

藤野寛

先日、ドイツの知人から、ヘルマン・シュヴェッペンホイザー氏が4月8日に87歳で亡くなられた、との知らせを受け取った。リュネブルク大学文化学部の学部長名で出された追悼文が添付されていた。(そのメールには、さらに、ほぼ時を同じくしてミヒャエル・トイニッセン氏が亡くなったという知らせと、こちらにはギュンター・フィガール氏がある新聞に寄せた追悼文が添えられていた。)

ヘルマン・シュヴェッペンホイザー氏は、私の博士論文指導教員(Doktorvater)である。1988年10月から1993年7月まで、私はフランクフルト大学哲学部で、先生の指導の下、博士論文執筆に取り組んだ。1994年1月に帰国することになり、直前の1993年12月には当時まだ数多いとはいえなかったフランクフルトの小さな日本レストランに先生を招待し、感謝の気持ちを伝えた。「日本料理を食べるのは初めてだ」と口にしながら、先生は食事を愉しまれた。何度も *vorzüglich* と言われたので、この形容詞は、それ以来、私の語彙に含まれることになった。「絶品」とでも訳すところだろうか。

戦後1952年に、アドルノがヴィザ延長のために一セメスター、USAに戻る必要が生じ、その代講にヘルムート・プレスナーがフランクフルト大学に呼ばれる、ということがあった。夫人のモニカ・プレスナーによる印象的な回想文が残されているのだが、その中で、グルメであったホルクハイマーが夫妻をフランクフルトの当時はまだ多くはなかったイタリア・レストランに——ゲッティンゲンにはこういうものは無いでしょう、とでも言わんばかりに——得意げに招待したエピソードが紹介されている⁽¹⁾。ホルクハイマーの弟子だったシュヴェッペンホイザー先生もやはり食を愉しむ人であることを、私は、プレス

ナー夫人のその文章を思い出しながら、心地よく確認していた。

その後もう一度だけ、私はシュヴェッペンホイザー先生にお会いしている。1998年の冬、文部省の公立大学教員短期海外研修制度を利用して二ヶ月間フランクフルト大学に滞在したのだが、その際にも、リュネブルクに先生を訪ねた。それが先生にお目にかかる最後の機会となった。

私は、先生に心の底から感謝している。しかし、自分はその感謝の思いを十二分に表現することなくしてしまった、という思いがある。1998年以降、何度もドイツに赴いているにもかかわらず、先生を訪ねなかったこともあるが、何よりも、手紙を書いて自分の近況を伝え、先生の近況を尋ねるということをしなかった。それは、単に怠慢であったということとどまらず、忘恩の振る舞いであったと感じる。私は、シュヴェッペンホイザー先生に対して恩知らずな人間だった。その悔悟の念が、今、シュヴェッペンホイザー先生を偲ぶ文章を書こうという気持ちを私に抱かせている。その際、単に先生への感謝の念を言葉に定着しておきたい、というだけでなく、自分にとって留学経験とは何であったのかを、もう一度確認しておきたい、という思いもある。

西ドイツのコンラート・アデナウアー財団から奨学金給付を受けることになり、私は1988年4月、ドイツに渡り、六ヶ月間マンハイムのゲーテ・インスティテュートでドイツ語を学んだ後、学籍登録のためのドイツ語試験に合格し、1988年10月からフランクフルト大学に籍を置いて学び始めた。

フランクフルト大学で学ぶことが決まるまでには紆余曲折があった。私はそれまでの約10年間、京都でもっぱらキルケゴールを勉強していた。その過程で、アドルノのキルケゴール解釈、さらには彼の哲学そのものに関心を抱くようになり、1986年には「京都倫理学会」という小さな学会で「キルケゴールとアドルノをつなぐもの」と題する発表をしたりもしていた。そして、当時、ヴッパータール大学神学部のヘルマン・ドイザーという研究者がアドルノとの関係に重点を置くキルケゴール研究を進めていることを知った。1986年の秋にDAADの留学試験を受けた際には、ドイザー氏に受け入れ教員になってもらえるか、問い合わせをし、とても親切な了承の返事をもらっていた(しかし、その奨学金試験には不合格だった)。

1987年の春に、アデナウアー財団の奨学金募集があったのだが、その募集はとても唐突なもので、全く備えができていなかった(募集が告知されたのは締め切りの前日で、文

学部の事務室が東京の財団オフィスに問い合わせたところ、三日ほど締め切りの延長が認められ、大急ぎで願書を書きあげての応募だった)ので、受け入れ教員捜しも何もできていなかった。それでも(万一合格すれば)多分、ヴァン・デル・グーゼ氏のところに行くことになるのだろう、とぼんやり考えていたのだが、面接試験の際にヴァン・デル・グーゼの名前を挙げたところ、試験官の三島憲一氏から「そんな田舎の小都市になど行かず、いろいろ楽しいこともある大都市にきなさい」と助言された。そこから悩みは始まったのであって、何人かの知人に意見を求めたところ、反応はほぼ二分された。大都市(例えばベルリン、ハンブルク、ミュンヘン……)に行き、その地の文化生活を満喫すべきだ、という意見がある一方で、小さいけれども伝統ある大学都市(例えばチュービンゲン、マールブルク、フライブルク、ハイデルベルク……)の落ち着いた環境、アットホームな人間関係の中でじっくり勉強すべきだ、とアドヴァイスしてくれる人も少なくなかった。

そんな時に、1987年の春のことだが、留学できることが決まった直後に、京都を訪問中のアクセル・ホネット氏を半日京都の町を案内する機会に恵まれ、氏に、アドルノに興味があるのだが、どこがお薦めか、と尋ねてみた。氏の答えは都市ではなく、アドルノ通の名前を挙げる、というもので、それは、ハーバーマス、トイニッセン、シュネーデルバッハ、ヴェルマーの四人だった。街としては、フランクフルト、ベルリン、ハンブルク、コンスタンツを意味した。(ホネット氏自身は、当時ハーバーマスの助手をしておられて教授資格取得前で、大学院生を指導できる立場には未だなかった。)

どうやら、私は、アットホームな大学都市よりは、イベント沢山の大都市に魅かれる心境に傾いていたようだ。加えて、当時私は、ヘルベルト・シュネーデルバッハの二冊の書物(*Philosophie in Deutschland 1831-1933*, *Der Grundkurs Philosophie*)を読み進めて深く魅了されており、ハンブルク大学を第一希望とする思いを携えてドイツに発つことになった。(もちろん、キルケゴールの国デンマークに近い街、という理由も小さくなかった。)

東京での試験の際には、試験官の三島氏から「君はもう歳を食っているから向こうに長く居ると浦島太郎化する恐れがある。二年ぐらい研鑽して帰ってきなさい」と言われ、その気になっていたのだが、アデナウアー財団の方針でドイツ語を学ぶべく六ヶ月間ゲーテ・インスティテュートに通うことになったマンハイムに着くと、財団の留学生担当だったフックス氏(恐ろしく早口の人で、そのドイツ語が聞き取れず、往生させられた)から、「われわれは君たちに楽しいドイツ滞在をプレゼントするために奨学金を出しているの

ではない。結果を出してほしい。東アジアからの留学生が、ドイツ文学や哲学など言語が重要な分野で苦勞することは経験上わかっているから、学位が取れる見込みがあるのなら、五年でも奨学金を給付する用意はある。実現可能性のある研究計画を書くように」と言われたのだった。私の場合、それは、博士号取得を意味した。つまり、ドイツでの受け入れ教員を捜すことは、博士論文指導教員を捜すことを意味することになったのである。フックス氏は、まずハンプルクのシュネーデルバッハ氏に打診の手紙を出して下さった。返事はお断りだった。「私は適任ではない」との理由のもとに。というのも、私はアドルノへの関心が昂じてドイツ留学を望むようになったのだが——なにしろ、当時日本にはアドルノについて教わるような人は一人も見あたらないように感じられた——博士論文を書くということになると、アドルノをテーマにそれをする自信はなく、それなら長年取り組んできたキルケゴールをテーマにやるしかないという話になり、すると、確かにシュネーデルバッハ氏が「適任でない」と言われるのも無理もないのだった。(氏には、キルケゴールに関する仕事は一つもなかった。)その際シュネーデルバッハ氏は、代わりにベルリンのトイニッセン氏とフランクフルトのアルフレート・シュミット氏をお薦めする、とのアドバイスを添えて下さった。

そこで、私は、ベルリンのトイニッセン氏に白羽の矢を立てることにし、再び打診してもらったのだが、今度も、返事はお断り。理由は、「私はすでに多くの学生を抱え込みすぎしており、余裕がない」というものだった。そして、トイニッセン氏もまた、代わりの適任者として自らの教え子であるハイデルベルク大学のギュンター・フィガール氏を推薦して下さった。ただ、私の心はすでに大都市に傾いてしまっており、しかも、ハイデルベルクはマンハイムから車で20分足らずの距離にあってすでに何度も足を運んでいて新鮮味に乏しく、私は、フランクフルトのアルフレート・シュミット氏を第三の候補とし、三度、打診してもらった。結果は、またしてもお断り。ただし、今回の理由は、「私の同僚のヘルマン・シュヴェッペンホイザー氏の方が、より適任である」というものだった。

「私の同僚」という言い方は、説明を要する。シュヴェッペンホイザー氏は、リューネブルク大学教授をしておられたのだが、フランクフルト大学の名誉教授の地位にもあった。その際、ドイツの名誉教授というのは、日本のそれのように定年退職後に与えられる称号ではない。追い追いかけてきたことだが、シュヴェッペンホイザー氏は、冬学期だけ、しかも三週間に一度だけリューネブルクからフランクフルトに出てこられ、3時間ほどの講義をされる、さらに加えて、院生の指導をする資格もある、という身分だった。四度

目の打診に対する回答は、ついに、受け入れ、ただし、留保つきの受け入れだった。留保の内容は、「先頃、私は虚脱症によって倒れ、それ以来療養中の身で、今も入院中であり、来たる冬学期に教務に復帰できるかどうか定かでない。もし、復帰できるなら、その時には相談に応じましょう。10月の初回の授業に——それが開講されることになった場合には——来てください」というものだった。（途方に暮れた私は、フランクフルトにホネット氏を訪ね、アドヴァイスを求めたのだが、「僕があなたの立場ならフランクフルトに来るね」との言葉によって、それ以上他の行先を捜すことをしない、という決断の後押しをされたのだった。）

そして、1988年10月、幸いにもシュヴェッペンホイザー先生は病から回復され、フランクフルト大学での講義は開講された。その講義の後の面会時間に初めてお会いし、お話しした結果、先生は、私を博士論文執筆学生として受け容れてくださった。長い紆余曲折を経て、四度目の試みの末に、私はようやくみなしごにならずにすんだ。博士論文指導教員になってくださる人が見つかったのである。

博士論文執筆学生と博士論文指導教員との関係とは、具体的にはどういうものなのか。もちろん、先生の講義には必ず出席する。そして、その後に設定された面会時間に、研究室で毎回おおむね一時間ほど面談する。その中味は、自分の研究の進捗状況を説明し、質問が出てくればそれをぶつける、というようなことだった。その際、私にとって有り難かったことが二点ある。

一つは、シュヴェッペンホイザー先生があまり人気のない教授だった、ということだ。もちろん、それについては、名誉教授というポジションからくるやむをえなさということもあっただろう。誰が、冬学期しか、それも3週間に一度しか大学に姿を見せない教師の指導を受けたいと望むだろうか。しかし、それだけではない。シュヴェッペンホイザー先生に対するフランクフルト大学哲学部の学生たちの評価は、概して、あまり高いものではなかったようだ。

ヘルマン・シュヴェッペンホイザー氏は、ホルクハイマー、アドルノの直弟子中の直弟子と呼べる人だ。フランクフルト学派第二世代に属するわけだが、しかし、「フランクフルト学派第二世代」と聞いて、人がまず思い浮かべるのはハーバーマスであり、シュミット、シュネーデルバッハ、ヴェルマーというところだろう。正統派の弟子筋にあたるにもかかわらず、シュヴェッペンホイザー先生の名前は出てこないのである。いや、むしろ、

正嫡であるにもかかわらず、ではなく、正嫡であるからこそ、という理由によるのではないか。つまり、師に忠実な弟子というのは、通例、縮小再生産となることを免れず、概して、生産的な仕事をするには至らない、という事情だ。「アドルノの思い出」という副題を持つインタビュー集(1991年)があり、ハーバーマス、シュミット、シュネーデルバッハらと並んで、シュヴェッペンホイザー先生も登場されるのだが、そこで、質問者のヨーゼフ・フリヒトル氏が、シュヴェッペンホイザー先生ご自身の仕事について、自らの仕事は後回しにしてでも師の世代の仕事の出版により多く尽力する、という仕方では背後に退く傾向があるのではないかと質問している⁽²⁾。それは、謙虚さの現れとみなすこともできる姿勢であって、シュヴェッペンホイザー先生自身、必ずしも否定しておられないのだが、しかし、この姿勢は、学問的には、やはり後退現象である、と言わざるをえない。上に述べた、縮小再生産である。師に忠実であるとすることは、往々にして、権威に寄り掛かるという姿勢を意味することにもなるだろう。第二世代のうち、この姿勢を代表する人こそ、アドルノ全集、ベンヤミン全集の編者であるロルフ・ティエデマン氏であり、シュヴェッペンホイザー先生だったと思う。それに対して、むしろ傍流と呼ばれねばならないのが、ボン大学から途中参加してきたに等しい存在だったハーバーマスであり、彼と近い関係にあったシュネーデルバッハ、ヴェルマーだったのだろう。そして、フランクフルト学派第二世代にあって多産で面白い仕事をしていたのは、明らかに、この傍流の人たちであり、学生・院生に人気があったのも、こちら側だった(今では、こちらを傍流と呼ぶ人はいない)。ちなみに、第三世代を代表するアクセル・ホネット氏も正確には傍流なのであって、ハーバーマスの助手ではあったが、教え子ではない。こちら、ベルリンからの割り込み組だった。私は、フランクフルトで、シュヴェッペンホイザー先生とホネット氏を指導教官としていたので、お二人の関係が良好かどうか、少し気にしたりもしていた。実情は、お二人の間には、ほぼ何の関係もなかった、ということのようだった。

これは、「学派」というものには常について回る問題であるに違いない。師の愛顧(承認)をめぐる闘争である。その際、正統派の弟子筋は、生産性を失い、面白いものはむしろ周縁部分からこそ生まれてくるという事情に、概してあるだろう。私は、京都でもそういう学派の雰囲気を経験した。私の学部学生時代の指導教官は、京都学派の忠誠組を代表する人だった⁽³⁾。京都学派の問題とは、生産的な仕事をする人が傍流からも現れ出なかった、という点にこそあるのではないかと——フランクフルト学派と比べてみると、そんな気がしてくる。

話を戻そう。ある女学生は、ペンヤミンを取り上げるシュヴェッペンホイザー先生の講義の後で、「彼の表現ではペンヤミンの魅力が伝えられているとは思えない」との感想を口にしていた。要するに、フランクフルト大学ではシュヴェッペンホイザー先生は不人気教授だったのであり、彼を指導教員とする大学院生はほとんどいなかった。（きちんと確かめたわけではないが、博士論文の指導を受けていた院生は、当時私一人だったかもしれない。）その結果として、私は先生をほとんど独占することになった。先生は、私のためにたっぷり時間を取ってくださった。面会時間の面談の後に、先生の行きつけの中華レストランに二人で食事に行くことも何度かあった。（留学中、私は終始、言語障害者であったわけだが、多人数の中でのコミュニケーションとは違って、対面での会話にはさほど不自由しなくなっていた。二人であれば、聞き取れなければ、聞き返すこともできる。だから、先生と二人で過ごす時間は、苦にならなかった。むしろ、愉悦の時だった。）ハーバーマスを指導教官とする大学院生と話したことがあるが、彼は「ハーバーマスは親切ではあるけれども、あまりにも多忙で、しかも指導する院生の数が多いので、こちらが希望しても、三ヶ月ぐらい待たないと面会の順番が回ってこない」とこぼしていた。人気のある有名な学者を指導教官とすることには、それはそれでマイナス面がついてまわるということだ。国際的に著名な学者の周りに群らがる群れの一員になる、という風には私は全くならなかったし、なれなかった。時として、まださほど有名ではないが、だからこそ時間的余裕があり、かつ年齢差があまり大きくないので友人のようにつき合える若い教員に指導教官になってもらう方がよい、という趣旨のアドバイスが聞かれたりもするのは理由のないことではない。

有り難かったことの二点目は、先生がフランクフルトに来られるのが、冬学期に、それも三週に一度にとどまるという頻度の少なさだった。それは、低空飛行を続ける私の精神状態には、むしろ好都合だった。留学中、私は、ほぼ一貫して精神的には不調であったので、人と出会い、人と喋ることは概して負担であり、しばしば苦痛だった。指導教官との面談とは、基本的には、「お悩み相談」などではなく、研究状況の報告であり、平たく言えば、研究がどれだけ進んだかを伝える場であって、どれだけ停滞しているかを伝えるそれではない。だから、とりわけ精神的に不調の際には、先生にあまり会わずにすむことは、精神衛生には、むしろ、よろしいのだった。

それでも、時の経過とともに、私の勉強もそれなりに前進し、精神状態も、少しずつではあれ上昇傾向を示したので、夏学期の間、まるまる六ヶ月、完全に音信不通になってしま

うのは好ましくない、ということで、たしか92年の夏学期には、リュネブルクのお宅に二泊三日でお邪魔し、持参した原稿をもとに集中的に議論する、という機会に恵まれた。ちなみに、その際あてがわれたのは、すでに自立して家を離れておられたご息のかつての子供部屋で、その御子息というのが、今ではこちらもアドルノ研究者のゲルハルト・シュヴェッペンホイザー氏である。(先生には娘さんもおられるのだが、デンマークでプロテスタント教会の牧師をしておられる、とのことだった。)

いま一度リュネブルクに赴いたのは、1993年4月に博論を提出した後、口頭試問(同7月)を目前に控えて、その直前対策をするために、今度は、先生の大学の研究室で議論する機会を持った時だった。「口頭試験ではどんな質問をしてほしいですか」と尋ねられたのには面食らった。ドイツにもそういう八百長の習慣があるのかもしれないが、そんな風習を知らない私に心の準備のあろうはずもなく、「特に希望はありません」と答えるしかなかった。

博士論文執筆学生と博士論文指導教員との関係というのは、ドイツでも議論され続けている悩ましい問題である。それは、教育学の問題であるのみならず、社会学や心理学の問題でもあるだろう。そこに万能の処方箋のようなものがあるはずはない。よい先生に当たるか否かは、運だ。加えて——より基本的な問題として——「よい先生とはどんな先生か」がさっぱりわからない。(それに対して、悪い先生とはどんな先生か、については——セクハラをしないと、学生をこき使わないとか——ある程度説明可能であり、そのように消去法で考えていくしかないのだろう。)ましてや、外国人留学生には、よい先生、さらには自分に合った先生を捜し出すための時間的余裕も、ドイツ人学生ならアクセス可能かもしれない情報網も与えられてはいない。繰り返しになるが、すべては運である。そして、私は運がよかった。

博士論文指導教員にお願いしなければならない仕事の中でも、留学生の死活にかかわる最も重要なものの一つに、奨学金給付の延長申請に際して推薦文を書いていただく、ということがある。アデナウアー財団の奨学金の場合は、六ヶ月ごとに延長が認められる仕組みになっていたのだが、その申請のためには、過去六ヶ月における研究の進捗状況と、論文提出までの見通しについて私自身が一文を草する必要があったのに加えて、指導教官にも、延長を支持する推薦文を書いていただかねばならなかった。シュヴェッペンホイザー先生は、いつも、A4の紙に2~3枚、びっしりと何か書いてくださった。それによって、私は、自分(の研究)が放置されていないとの実感を六ヶ月毎に抱くことができた。

もちろん、研究指導という点で一番重要なのが、論文そのものの指導であることは言うまでもない。その点でも、シュヴェッペンホイザー先生には感謝の思いしかない。1992年頃には、私はいよいよ論文の初稿の執筆に取りかかっていたのだが、一章書き終わるたびごとに、それを先生に郵送してコメントしていただく、という風に書き進めていった。（最終章は、「終章で新しい論点を持ち出すことはよろしくない」とまるごとばっさり切り捨てられ、一から書き直さねばならない羽目になったりもした。）そして、1993年の3月によく論文提出にこぎつけたのだが、提出した論文を口頭試験終了後に返していた。そこには、コメントがこと細かに書き入れられていた。そのコメントは、ズテリン・ドイチュという古い字体で書かれていたために、私にはしばしば解読困難で、出版に向けた改稿に際しては、その解読に膨大な時間を要し、大いに苦戦したのだった。（口答試験に合格した後、さらに六ヶ月ドイツに留まったのは、改稿により出版原稿を完成するためだった。）しかし、そういう点も含め、先生による書き込みだらけのこの提出稿は、私にとって宝である。自分が大学教員になり、学生・院生の指導をする身になってこのかた——実践できているか否かは別に——シュヴェッペンホイザー先生が私にしてくださったことを自分もするようでありたいとは、私が常に念じていることである。

先生が人気のない教員であったことのマイナス面というものも、もちろん、ある。人気、不人気という問題以前に、先生は演習という授業をお持ちでなかった。大教室での講義が唯一の授業だった。フランクフルトでは、私は指導教官のゼミを経験していない。その結果、私は、同じゼミに所属する友だち、研究仲間と呼べる存在を、文字通り一人も持つことがなかった。私のフランクフルト時代の勉強は、ほぼ終始一貫、シュヴェッペンホイザー先生との一对一のやり取りの中でだけ進められたのだった。これは、異常なことではないかと思う。その結果、私には、フランクフルト大学での留学を通して生まれた、共に哲学を学ぶ同級生、先輩、後輩との人間関係というものが皆無である。私の交友関係は、もっぱら、いつの頃からか生まれた日本学専攻の学生とのそれに限定された。（その後、一橋での同僚となったラルフ・デーゲン氏との交友は、その一例である。）

ちなみに、この日本学専攻学生との交友は、私にとってとても大切なものになった。というのも、私は、博士論文の原稿が書き進むと、それを、まずは日本学専攻の友人たちに見せて、ドイツ語を直してもらったからだ。これは興味深い経験だった。修正の度合には個人差が現れ、とても厳格に直し、原稿を真っ赤にして返してくる人もいれば、修正は最小限にとどめ、可能な限り原文を尊重してくれる人もいた。その際、修正が少ないと嬉し

い、という風にはならなかった。むしろ、修正が少ないと物足りなく感じるほどに、私は修正されることを欲した。自らの拙いドイツ語がより良く変わっていくことの実感は、掛け値なしの快感だった。ああ、ドイツ語はこういう風を書くのか、という感慨である。加えて、哲学専攻ではなく、哲学には疎い日本学専攻の学生に読んでもらうのであるから、内容的に非専門家にも理解可能な文章を書かねばならず、私の書くものは平明なものにならずにはすまなかった。それは、久しく鶴見俊輔氏を思想上の師の一人としていた私にとって、意に沿う事情だった。いつしか、私には、ドイツ語を書くことが愉悦になっていった。読むことに劣らず楽しい——聞き取ることは、依然として、ただもう苦しいのではあったが。

最終的に、シュヴェッペンホイザー先生は、私の博士論文に、合格の評価を与えて下さった。評価は「優(magna cum laude)」であって、副査を務めてくださったヒンリヒ・フィンク-アイテル先生も同じ評価だった。フィンク-アイテル氏は、トイニッセン氏の教え子で、ヘーゲルで博士論文、キルケゴールとフーコーで教授資格論文を書いておられた。アクセル・ホネット氏とはベルリン時代から交友関係にあり、最終段階で、ホネット氏が「時間的理由から」副査の地位を降り、フィンク-アイテル氏が引き継いでくださったのだった。フィンク-アイテル氏を書いてくださった審査所見を読む時間は、私の人生にあって最も幸せな時間の一つとなった。その後、博士論文を出版してくれる出版社探しをすることになり、私は博論の要約にフィンク-アイテル氏による所見を添えて、30ほどの出版社に出版可能か否かを打診する手紙を送ったのだが、Könighausen-Neumann 社が出版を引き受けてくれたのは、ひとえにフィンク-アイテル氏の審査所見のおかげだった、と感じている。なお、フィンク-アイテル氏は、私が帰国した1994年の末に亡くなられた。死因はエイズだった。もし、フィンク-アイテル氏の早い死—49歳だった—がなかったら、私はその後、もう少し熱心にドイツの学問の世界とのコンタクトを保つ努力をしていただろう、という気がする。

それに対して、シュヴェッペンホイザー先生による所見は、極めて好意的なものではあったが、しかし、私の論文が先生を十分には納得させていないことはなんとなく伝わってくる、そういう内容のものだった。7月に口頭試験が行われ、90分ほどかかった試験の後、合否は私が退出したその部屋で直ちに15分ほどかけて審議され、その場で合格という結果が伝えられ、5人の試験官の先生ともどもそのまま学部長室に場を移してシャンペン

をあけて祝杯を挙げる、という風に、簡単な、形式ばらないセレモニーが行われたのだが、その場でのスモール・トークの中で、シュヴェッペンホイザー先生は私に「日本語にも Dialektik という言葉はありますか」と尋ねられたのだった。私が「もともと日本語にはありません。あまり適切とはいえない翻訳語が作られているのみです」と答えると、いかにも納得したというように「だから、あなたには Dialektik が理解できないのですね」という感想を口にされたのだった。その際、Dialektik (弁証法) という概念は、私が博論の中でもっとも力を注いで解明しようと試みた概念の一つだった。それが本当のところでは「わかっていない」と考えておられたということは、シュヴェッペンホイザー先生が私の博論を本心ではどう評価しておられたか、ということを雄弁に物語っているように感じられた。つまり、シュヴェッペンホイザー先生は、Dialektik というキルケゴール解釈にとって肝心要の概念を——のみならず、フランクフルト学派の思考にとっての最重要概念を——私が本当のところでは十分理解していないとの認識に立ちつつ、「優」と評価して下さったのだろう。私のためにできる限りのことをしてやろう、という姿勢をそのように終始一貫して保ちつつ、先生は私の指導にあたって下さったのだと思う。

ドイツ留学中の半ば以上の時間を、私は、神経症的な精神状態の内に生きていた。確定的な病名を得ることにならなかったのは、ただ、精神科に足を運ばなかったからでしかない。そうしなかった理由は、精神科医を前にしても、自分の症状を正確に伝える自信が持てなかったからだし、医師の語るドイツ語を理解できる自信もなかったからにすぎない。

もし、シュヴェッペンホイザー先生に指導教官を引き受けていただく、ということがなかったら、フランクフルトで、私は、確実に没落していたと思う。(例えば、上記第三候補に上がったアルフレート・シュミット氏の人柄はその後少しずつ分かっていったのだが、氏が指導教官では、私はまず生き延びられなかっただろう。)心の病を病んでボロボロになって帰国していたか、さもなければ、帰るに帰ることができなくなって、ぐずぐずドイツに居続け、消息不明になっていたのではないか。(実際、私は、滞独初期の二年ほど、全く音信不通状態に陥り、京都では「藤野は死んだらしい」という噂も流れたと聞く。)私は、シュヴェッペンホイザー先生によって、文字通り、救われたのであり、しかし、そういうことは、先生に伝えようとしても——ドイツ語による表現の困難さということはさておいても——できることではなかっただろう。ただ黙して感謝するしかない、と感じる。

(2015 年 6 月記)

- (1) Monika Plessner: Miteinander reden heißt miteinander träumen. Gruppenstudie mit Horkheimer, in: Frankfurter Allgemeine Zeitung Nr. 226 vom 28. September 1991.
- (2) Josef Früchtel / Marina Calloni: Geist gegen den Zeitgeist: Erinnern an Adorno, Frankfurt am Main 1991, S. 29.
- (3) 辻村公一先生については、竹田篤『物語「京都学派」』の中に、私の印象を覆すような興味深いエピソードが紹介されている。「辻村公一も、いまや京大では「自分で考える(Selbstdenken)の哲学」は「全滅」し、「安全無事な哲学史が支配するに至った」として、大学院へ入学せず、郷里の浜松へ帰っている。」(竹田篤『物語「京都学派」』、中公文庫、2012年、277頁)

(ふじの ひろし／言語社会研究科教授)